国際審判員　千田隆夫(愛知県ボート協会)
国際審判員　田畑喜彦(愛知県ボート協会)

Asian Cup 1 参加報告書

平成22年6月9日より6月17日までシンガポールで開催されたAsian Cup1に審判として参加しましたので、ここに報告させていただきます。

まず、報告にあたりこの機会を与えていただいた日本ボート協会関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。

さて、Asian Cup 1は8月から開催されるYouth Olympic Gamesのプレ大会として企画されたものであり、FISA からは Events Commission の Svetla Otzetova (BUL) 、 Umpiring Commission(Youth Olympic Games 本大会で審判長を務める) の Guylaine Bernier(CAN) 、 Event Director の Mike Tarner などの要職が参加するものであった。

この大会には日本からは審判長 President of Jury として千田隆夫氏と私田畑喜彦の二名が参加した。

大会は二つのセッションに分かれており、前半は2008年にSingapore Riverの下流に湾内の淡水化を目的に建設された河口堰Marina Barrageの上流の1,000mコースで、後半は郊外にある飲料水用湛水池であるPandan Reservoir 2,000mコースで開催された。

1.　コースについて

①　　1,000m(Marina Reservoir)

このコースはシンガポールの政治･経済の中心であるシティ･ホールの東、Marina Bayの一角に位置し、宿泊先のホテルから車で10分程度、周辺では臨海部の再開発が行われている。さしずめ東京でいう開発中のお台場あたりの雰囲気でしょうか。

Youth Olympic Gamesではカヌーと会場を共有するとのことであり、ボートのプレ大会が終了後はカヌーのプレ大会が開催されるとのことであった。

写真-1　ゴール付近から対岸

写真-1はゴール付近から対岸を臨んだ写真であるが、シティ周辺に立ち並ぶ高層ビル群、世界最大の観覧車(Singapore Wheel)そして左端がカジノ併設のホテルである。

②　　2,000m（Pandan Reservoir）

シンガポールの西部､パンダン貯水池(Pandan Reservoir)に設営されたコースである。ここには常設のシンガポールボート協会クラブハウスが隣接するが、なんと言ってもその特徴は「平行四辺形」のコースである。直線で2,000mがぎりぎりのため､長方形のコースを平行四辺形にゆがませてレイアウトしている。遊水エリアが狭くゴール直後に速やかに艇を止めなければ岸に乗り上げるような状況であり、無理やり2,000mのコースを配置している。

貯水池と言っても臨港部･工場地帯に位置しており、1,000mコースほど都会部にはないがそれなりの建物は周辺に配置されていた。

写真-2　クラブハウス内での表彰式
メダルプレゼンテーターは千田氏

今回の 2,000m コースでの大会は付随的に開催されたものであり、報告は割愛させていただくが、特筆すべきはシンガポール協会クラブハウスは Nicholas Ee の私的財産であり、シンガポールボート協会に開放していることであった。
彼の職業は測量士(？)と聞いていたが、私有財産として所有するクラブハウスの立派さに彼我の差を感じてしまった。

2.　大会運営について

①　施設

a)　スタートエリア

スタートタワーは浮遊式であり、両面には視認性に優れたデジタル式の時計が配備されていた。発艇はシグナル式でありスイスタイミング社のシステムによりゴールタイムと連動させるものであった。
線審小屋も浮上式であり発艇のスタートボタンに連動した静止画像によりフライングを判断する。

写真-3　スタートタワー

b)　フィニッシュエリア

フィニッシュタワーはガラス張りの言わば温室であり、空調設備があると言っても 6 月のシンガポールはそれなりに苛酷であった。主席判定員はスイスタイミング社のモニターを確認、着順を確定した後、プリントアウトされた着順表を再度確認するというシステムであった。

写真-4　線審小屋内部状況

②　国内審判

今回参加した国内審判は、固定部署に配置され、よくトレーニングされてはいたが、言わばニコラスファミリーとでもいうべき集団であった。また、夫婦、親子、兄妹と言ったある種狭い範囲でのスポーツ集団により編成されていた。これもシンガポールのボート協会そのものがニコラスの私的財産をもとに活動しているが故と考えれば理解は容易であった。

写真-5　判定塔内部状況

3.　審判業務について

今回の審判団は President of Jury の千田氏以外に国際審判団は最大 12 名であった。マレーシアの審判員が 5 名と最大勢力であり、かつては同一国家であった両国の関係から複雑ながらも親密ぶりがうかがえた。
また今回の大会に併せ実施された審判試験で 7 名受験中 2 名（女性）が合格され、後半開催された 2,000m のレースでは国際審判として参加した。

表-1　Asian Cup 1 審判団

President of Jury	SENDA Takao	1230	JPN
1	HEBLEKAR Krishnanand	1390	IND
2	GUPTA Sandeep	1536	IND
3	Victor NG Wing Ning	1441	HKG
4	TABATA Yoshihiko	1265	JPN
5	Abdul Malik Bin Hj ABDUL GHANI	1298	MAS
6	Noor Azman Bin MOHD KASIM	1403	MAS
7	Abdul Halim Bin AZIZ	1398	MAS
8	Anuar Bin ABDUL RAHMAN	1401	MAS
9	Sallehudin Bin ABDUL MANAF	1400	MAS
10	Imtiaz KHAN	1195	PAK
11	Roozaimy OMAR	1557	SIN
12	TAN Tat YEOU		SIN
13	YAHAYA Zarifah		SIN
14	KALIAPPAN Sathiyah		SIN

*13,14 は今回実施された試験により新たに FISA Umpire となった二人。

① 各部署について

a) Umpire

初日、最初のポジションが Umpire1 であった。ドライバーは YOG を見据え、固定との事で、Umpire1 は女性ドライバーであった。スタートポンツーンの 3 レーンと 4 レーンの間が凹型にくぼんでおり、この位置にモーターが配置される。Umpire としては申し分のない位置である。レースは特段問題なく進んだが、JW1X で一位通過の香港クルーからクレームがあった。確認すると、ウォームアップエリアで発艇に向かう最、エリア内の中央にいたレスキューボートと衝突したとの事である。彼女のボートを見ると、発艇時には気づかなかったがトップボールが曲がっているようであった。無線でレスキューボートに連絡し、配置場所に注意するよう伝えた。香港クルーのコーチからは文書によるクレームがあったようである。

写真-6　Asian Cup 1 審判団

写真-7　モーター配置スペース

b) Judge at the finish

施設の項でも述べたが、スイスタイミング社による計時システムが用意されていた。時計は 1/1,000 秒まで計測可能であるが、FISA の規定によりリストには 1/100 秒までの表記である。

主席判定員は計時システムにより着順を確認し、作成された判定表を確認するという手順で進められた。

c) Athlete Weighing

今回の大会は YOG のプレ大会ということで設備的にはほぼ満足ではあったが、唯一不満だったのが計量用の体重計であった。お世辞にもよいとは言

えず、またニコラスが用意した予備軽量の体重計が本計量用のものより軽く表示されるという問題もあった。私が計量を担当した時に気付いたため、タナーに伝え、予備計量用のものは一旦撤去されたが、翌日また使用されていた。どうやらニコラスが持ち出したようだがタナーに厳しく注意されていた。

写真-8　出廷桟橋

d) Control Commission

海外でのレースで国民性の違いが最も出るのがこの部署ではないだろうか。常々日本人は頑張るなぁと感じてしまうのであるが、パキスタンから参加した KHAN さんはシャツをびっしょりにしながら日本人顔負けの活躍であった。聞くところによると大学教授と言うことであったが国民性か人柄か、尊敬に値する人物であった。

4.　Accommodation

①　ホテル

今回用意されたホテルは YOG のオフィシャルホテルのひとつであった。写真-9 はホテルの窓から見たラッフルズホテルである。当然のことながらラッフルズに泊まれるわけもないが、このような光景が見られるだけでも十分なホテルであった。

写真-9　ホテルから見た RAFFLES HOTEL

②　会場へのアクセス

ホテルから会場へは車で 30 分程度, 毎日開催者に用意されたバスで移動した。直線距離は近いのであるがシンガポール湾を大回りするためこのような時間がかかる。しかし国土のサイズもあり、こんな大都会に位置するボートコースがうらやましく思えた。

5.　その他

今回の大会もそうであったが、各国の審判から「日本はいつ国際大会を開催するのだ？」という問いかけに対し、今回も答えに窮するだけであった。

先に終了したアジア大会では軽量級に出場したボート選手の活躍は日本のプレゼンスを十分に示すものであったが、長良川の世界選手権以降国際大会が開催されぬ現状に寂しさを感じているのは私だけではないのでは。

最後になりましたが、報告書提出が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

以　上